1976年2月25日 第３種郵便物認可（毎週４回月・火・木・金曜発行）2021年5月4日SSKO通巻10779号「おあしす通信」2021年4月号

東北と熊本をつなぐ
～ 2018年　東雲(しののめ)の会の皆さんとの支援活動 ～
（おあしす通信　2018年3・4月号より）

東日本大震災から7年、おあしす福祉会がおこなってきた「被災地の子ども達に木のおもちゃを贈る活動」は東北から避難している方々と協力し合いながらおこなうという新たな形へと発展した。

東雲の会との交流

東京では今も5,000人以上の方が避難生活を送り（2018年2月当時）、そのうち江東区の東雲住宅では東北から避難してきた300世帯、約600人の皆さんが生活している。今回交流をしたのは、毎週2回開かれる「サロン」と呼ばれる交流や歓談の場で、避難者の自治会である東雲の会が江東区社会福祉協議会とともに運営をおこなっている。私たちは2017年10月からユニカール（カーリングの床上版）というスポーツなどで交流してきた。2018年2月の開催では冬季オリンピックでカーリングが注目されたこともあり、拍手と歓声が何度もフロアに響いた。

「そだねー」の声が響く

「熊本の子どもたちのために」＝木のおもちゃを贈る活動を一緒に＝

『支援してもらう』ばかりでなく自分達が何かしたい」という気持ちに応えるために

東雲の会の皆さんに初めてお会いした時、私たちは会の皆さんのお子さんやお孫さんたちのために木のおもちゃをプレゼントしてはどうか、ということを考えていた。しかし、皆さんの思いは私たちが考えていた事と違っていた。

「避難した当初はいろいろな物や援助がいただけて本当にありがたかった。でも、これからの私たちはここ（東雲住宅）を出て暮らすことを考えなくてはいけない。何かしてもらうばかりではなく、自分たちも何かをしたい」これが東雲の会の皆さんの思いだった。

そこで私たちの「被災地の子ども達に木のおもちゃを贈る活動」について皆さんに説明し、協力をお願いした。おあしす利用者が講師として参加、総勢20名以上によるサロンでのおもちゃ作りがおこなわれ、わずか2回の開催で40個もの木のおもちゃが完成した。完成したおもちゃは地震で大きな被害を受けた熊本県益城町の保育所に贈ることとなった。

熊本の子どもたちのためのおもちゃ作り

様々な思いで生活される方とともに

「サロン」では楽しい会話の中に時々、福島の地への思いや将来の生活への不安を聞くことがある。今回の作業でも「こうして手を動かしていると嫌なことを考えなくてすむからね」と笑いながら話してくれる方がいた。

完成した木のおもちゃの素晴らしい出来栄えに「皆さん、お上手ですね」と何気なく声をかけたところ、「もう７年も仕事しないで、こんなことをやってるからね」と苦笑いしながら答えた方もいた。

東雲の会の皆さんはいつまでもこの住宅で暮らすわけではない。これからの一年で、住んでいた町に帰るか、新しい場所で生活を始めるか決めなければならないが、避難している方々の中には今後の生活に見通しを持てずにいる方が多くいる。サロンで過ごす時間はとても楽しいものだが「楽しかった」だけで終わってはいけないと思った。

2017年に熊本を訪れた際、「私たちのことをわかってくれる方が作ったおもちゃのぬくもりは子どもたちにもきっと伝わります」と言ってくれた方がいた。地震と原発事故で住み慣れた町を離れなければならなかった東雲の会の皆さんはおそらく熊本で被災した方々の大変さを誰よりも理解し、同時に障がいがあっても誰かの役に立ちたいと願う私たちの活動を誰よりも理解してくれたからこそ、この「被災地の子どもたちに木のおもちゃを贈る活動」に協力してくれたのだと思う。東雲の会の皆さんと一緒に熊本に贈るおもちゃ作りができたことは私たちにとって大変嬉しいことだった。

木のおもちゃで東北と東京と熊本をつなぐ

2018年4月、3回目となる熊本訪問の前に木工製作の様子と作り手からのメッセージをビデオ撮影、編集した動画を熊本へ持って行った。東雲（しののめ）の住宅に住む東北から避難している皆さんとおあしす利用者による木のおもちゃ製作の様子も含まれている。今回はおもちゃを贈った子ども達やご家族、そして活動に協力してくれた方々にその映像を見ていただいた。

熊本の皆さんには、作り手達の顔や製作の過程を見てもらうことで、東京にいる私たちをより身近に感じていただけたのではないかと思う。皆さんおもちゃを手に、うなずいたり、時には返事をしたりしながら、笑顔でビデオメッセージを見てくれた。そしてその様子をまたビデオで撮影し、今度は東京にいる皆さんに見てもらっている。自分の作ったおもちゃを手に喜んでくれている子ども達の姿は障がいからの回復を目指す私たちにとっても大きな励みになり、自信につながっている。

熊本地震から2年 木のおもちゃと 熊本の子ども達を 訪ねて

～震災から2年・・・
2018年4月　熊本訪問～
（おあしす通信　2018年8月号より）

益城町でおこなわれた「2年目の復興祭」ライブ
（左から濱田龍郎さん、歌手　山本けいさん、
シンガーソングライター　樋口了一さん）

2016年10月に「熊本で被災した子ども達に木のおもちゃを贈る活動」を始めてから、たくさんのおもちゃのリクエストをいただき、既に400個を超えるおもちゃを熊本に発送した。今回の訪問では、おもちゃを贈った子ども達とご家族にお会いしてきた。

◆木のおもちゃを贈ったご家族

今回の訪問の一番の目的は、私たちが贈ったおもちゃがどうなったか？子ども達やご家族はどうしているか？を見てきて、東京の皆さんに伝えるということだった。そこでピアワーク・オアシスにお礼状をくださった方たちの中から何組かのご家族に連絡をとり、お会いして被災した当時とその後の話をうかがった。

森嶋凛（もりしま　りん）ちゃん

一野諒丞（いちのりょうすけ）くん、祐誠（ゆうせい）くん

西村斗翔（にしむら　とわ）くん

森嶋凛ちゃんは当時2歳、地震が起きた当時は避難とアパートの応急修理のために1ヶ月間、自宅を離れたそうだ。現在は地震前の生活に戻ることができたという。凛ちゃんはプレゼントした木のおもちゃを、自分の持っている人形に挨拶させたりして遊んでくれている。

一野祐誠くんは生後2ヵ月、まだ首がすわっていない赤ちゃんだったが、被災時は一家で5日間の車中泊をした。兄の諒丞くんとともにオリジナルのヒーローショーでもてなしてくれた。

西村斗翔くんは震災当時813ｇの小さな男の子で病院にいた。西村さん一家はまだ仮設住宅で生活されているが、来年には新しい家が完成するとのことだった。

◆変わっていく町並み

熊本地震から2年が経過し、益城町も西原村も少しずつ様子が変わってきた。特に益城町は損傷が大きかった総合体育館や町役場などの主な建物が解体され、再建に向けた工事が始まっていた。

（左）益城町総合体育館　（2017年4月撮影）と
（右）現在の総合体育館跡　（2018年4月撮影）

◆本当の意味での復興を目指して

益城町や西原村を歩いてみると多くの方の努力によって、少しずつ町が元気を取り戻しつつあることがわかる。

ただ「もの」が整っても、全ての人の気持ちがすぐに前向きになれるわけではない。震災によって失ったものは大きく、誰もが当時の記憶を胸に生活を続けていることを忘れるわけにはいかない。住んでいる方々が本当に安心して暮らせるようになるには、まだ時間がかかるだろう。

震災で施設が全壊した益城町の障がい者支援施設「そよかぜ福祉作業所」の理事長　濱田龍郎さんはこう言っている。

「益城町も『復旧』は進んでいます。私たちも作業所を立て直すことができました。でも本当の意味での『復興』はまだ緒に就いたばかりです」

益城町　九州ラーメン党そよかぜ福祉作業所
理事長　濱田龍郎さん

◆これからの私たちにできること

東日本大震災から7年という時を経て、おあしすの被災地支援活動は「木のおもちゃを贈る活動」だけではなく、それぞれの地域でお互いの製品を販売したり、東北、東京、熊本でメッセージを送りあって交流するなど、様々な形に発展してきた。今やこの活動は法人単独のものではなく、地域の協賛してくださる方々や被災地の方々との連帯により成り立っている。私たちはこの活動を一方向の支援ではなく、立場が違ってもお互いが尊重し合い、協同して何かを作りあげる活動にしていきたいと考えている。

東雲の会の皆さんと作ったおもちゃをビデオメッセージとともに益城町や西原村に届けてきた

おもちゃで遊ぶ、益城町立第四保育所の子ども達

木のおもちゃと一緒にビデオメッセージに応えるりんちゃん
（元気ですか？）「はーい」

「・・・すごいね」
製作の過程やおもちゃで遊ぶ子ども達の動画にじっと見入るシンガーソングライターの樋口了一さん
熊本での活動開始からご協力いただいている

地域と熊本をつなぐ
～ 2019年　リコーリース株式会社の皆さんとの支援活動 ～

被災から3年半、4度目の熊本訪問は地域の企業リコーリース株式会社の皆さんと一緒に作ったおもちゃを贈るための旅となった。

リコーリースとの交流

江東区東雲に事業所を置くリコーリース株式会社（本社：千代田区紀尾井町）は独自にピンクリボン活動や富士山緑化活動、東日本大震災の復興支援活動をおこなうなど様々な社会貢献・地域活性化のための活動に力を入れている。また、江東区社会福祉協議会主催の販売「まごころ市」にも参加、区内障害者施設に自主製品販売の機会を提供してくれている。出店時に当法人の東北・熊本への支援活動を紹介したところ、法人への寄付と共同での支援活動をご提案いただいた。

地域の企業の皆さんとおこなったおもちゃ作り

事業所を見学していただき、過去の支援活動を説明しながら話し合った結果「寄付金だけでなく、お互いが見える形での支援を」ということで、熊本で被災した子ども達のため、一緒に木のおもちゃを作って贈ることとなった。

2019年2月、おあしす利用者が講師として会社を訪問し、社内で声をかけてもらい集まった有志の皆さんにおあしすの支援活動を紹介し、一緒に会議室でのおもちゃ作りをおこなった。紙やすりを手に材料を擦って表面をなめらかにし、ワックスを塗って艶を出してから組立てをおこなう。

最初は慣れない作業に戸惑い気味だった皆さんも、利用者と一緒に作業する中で少しずつ笑顔が生まれ、終了時には熊本の子ども達に贈る20個のおもちゃが完成した。おもちゃは次回の熊本訪問時に益城町の保育所にプレゼントすることとなった。

地域で取り組むという形での復興支援

リコーリースの皆さんは「寄付金とは別の形での支援を一緒におこないたい」と考えてくれた。今回、立場が違っても同じ地域の中で関わりを持つことができたこと、「熊本の子ども達のために」と共通の思いで協力し合っておもちゃを作り上げたことは、「誰もがかけがえのない存在としてお互いに支え合える社会」を目指す私たちにとっても大きな前進だった。

～木のおもちゃとともに熊本へ～
被災から3年半の熊本

2019年9月、地域の方々とともに作ったたくさんのおもちゃを持って再び熊本を訪れた。
益城町では少しずつ新しい建物が建ち始めていた。再建される益城町総合体育館は外観が整い始めた。木山神宮は社殿が解体され、更地になっていたが元の建材を保存し、再建の際にはなるべくそれらを生かして建て直すとのことだ。

再建される益城町総合体育館
（2019年9月撮影）

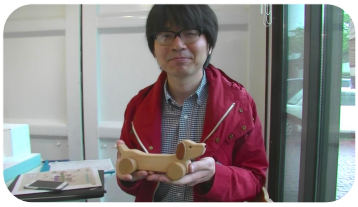
木山神宮の社殿は解体され、再建を目指す　（2019年9月撮影）

西原村では300世帯以上あった小森の仮設住宅の入居が現在90世帯ほどになり、5棟あった住宅を１棟に集約した。少しずつ町並みも人々の暮らしも変わりつつある。

益城町役場広報　田中康介さん

益城町役場広報の田中康介さんによると「仮設住宅は空き家が多くなり（役場近くの木山仮設住宅は入居世帯が半分になったとのこと）、防犯対策としても棟を減らし、住民を集約していく」とのことだった。

熊本大学の佐藤嘉洋さんによると「住民については、仮設住宅から災害公営住宅（自宅再建が叶わなかった方が入居）への転居が始まった。その際に一度できたコミュニティが壊れるため、もう一度近隣との関係を作り直さなければならず、そこに大きなストレスが生じている」「仮設住宅では集会所に木のおもちゃを置いたことが住民の交流に大変役立った。子ども達が木のおもちゃで遊ぶことで大人たち、家族同士の交流が生まれる。公営住宅の集会所でも同じように木のおもちゃを置かせてもらうことはできないか？」との相談を受けた。2020年夏ごろに災害公営住宅が揃って入居が落ち着いたところでまた相談したいとのことだった。


熊本大学　佐藤嘉洋さん

災害から立ち直る過程で町が大きく変わりつつある。人の心が建物が作られるスピードに合わせられるとは限らない。役に立てることがあればぜひ連絡してほしいと伝えて、再会を約束した。

益城町の保育園への木のおもちゃプレゼント

熊本地震で大変な被害に遭った益城町の4つの保育所を訪問し、江東区の企業であるリコーリース株式会社の皆さんとともに作ったおもちゃを届けた。最初の訪問時にプレハブ作りだった益城町立第五保育所は別の場所に再建されていた。前回訪問時のことを覚えていてくれた先生に再会することもでき嬉しかった。

益城町の保育所にて　（2019年9月撮影）

益城町立第二保育所、益城町立第三保育所では子ども達と交流、前回以上の大歓迎を受けた。箱を開けた瞬間、目にしたおもちゃに歓声をあげ、元気に遊びだす子ども達の姿、別れを告げた後も見えなくなるまで手を振ってくれた子ども達の姿は忘れられない。今回も子ども達の様子と熊本の皆さんからのメッセージはビデオカメラで撮影し、東京に届けることができた。

熊本からのメッセージ

継続ということ
助け合って生きるということ

平成28年（2016）の熊本地震から今年で五年目を迎えます。あの日から今も続くおあしす福祉会の皆様のご支援と、友情の継続に心から感謝します。

平成元年のある春の日。出前先の福祉施設で知り合った少年がきっかけで始まったラーメン屋のオヤジの「ボランティア」とかいう活動も、もう随分と長くなりました。

雲仙普賢岳噴火被災地でのラーメン炊き出しが最初でしたが、その後阪神淡路大震災・三宅島噴火・奄美水害・北海道地震と、北から南まで、災害が起こるたびに列島を駆け巡っています。中でも最初の年に自らに課した「十年来るよ」と約束した東日本大震災は、今年で十年目となりました。

ところが「約束破り」は新型コロナウィルス（以下、コロナ）の影響で現地行きを断念したこと。今年もまた「東日本に行けるのか、行けないのか」、全国のボランティア仲間と、思案投げ首の日々を悶々と過ごしています。熊本県でもコロナの影響は例外ではありません。しかし、影響が無いと判断され、要請があればラーメンの炊き出しに赴いています。コロナの終息を願いながら、我が九州ラーメン党は、現在次のような計画を立てています。

＊３月１１日　「十年目の東日本に行く」

＊４月１４日　「熊本地震復興祭を実施する」

また、コロナの影響をモロに受け、仕事が激減したり、閉店されたりして困っている方々が私たちの周りにも大勢いらっしゃいます。個人マッサージ店、占い師さん、発表の場がない劇団、歌手・・・。それらの方々に無償で場所の提供や手助けをする活動も続けています。

最後に、身近な「心に沁みるいい話」を紹介して結びにします。新年の目標を「ラーメンサンタ」と決めた利用者さんの話です。

「ぼくは今年のクリスマスに恵まれない子供さんたちが暮らす児童養護施設にラーメンとおもちゃを届けます。そのために工賃の中から毎日積み立てをします」　すると彼の考えに共鳴した方が現れました。

「私も彼のために毎月積み立てをします」　私は私で彼に約束をしました。

「じゃ、日程が決まったら、その日はラーメン屋をお休みにして、施設で出前出張ラーメンをしましょう」

こういう時代だからこそ、人は互いに助け合って生きていきたいものです。

「人は人のために生きてこそ人」の実践を継続していこうと思っています。

特定非営利活動法人ボランティア仲間九州ラーメン党
理事長　濱田　龍郎

濱田龍郎さんとの出会い

「明日は30分ぐらいなら時間が取れるかも知れません」

シンガーソングライター樋口了一さんから名前を聞き、恐る恐る電話をかけた時の濱田龍郎さんの言葉だ。

翌日、急きょ訪問した「ましきさいがいFM」から濱田さんのいる作業所に向かおうとしたがバスもタクシーも来ない。約束した時間に間に合いそうもないことからお詫びして会うのはあきらめようと電話したところ、「それならそちらに行きます。FM局も見たいし」と濱田さんは自分で車を運転して現れた。九州ラーメン党の被災地での炊き出しは1991年の雲仙普賢岳から始まる。熊本地震では益城町の施設が全壊し被災者となったが、被災地支援に関しては大先輩だ。

濱田さんの運転で作業所まで連れて行ってもらい、お互いの活動を話すうちに盛り上がり、30分の約束だったはずが気づいたら3時間も話し込み、ラーメンを仕入れる話までしていた。長居したことを詫びたら「今日はそういう運命だったんです」と笑っていた。プレゼントしてくれたご自身の本のサインの横には「一度しか会ってないけど親愛なる友へ」という言葉が添えられていた。

あの時、益城町を駆け回った後に食べた九州ラーメン党のラーメンが熊本で一番美味しかったと今でも思っている。

（武藤　康司）

熊本からのメッセージ

熊本地震を経験して

元「西原村子育てひろば」支援員　石山　美和

2016年4月14日木曜日。夜9時26分、西原村は突然震度5強の激しい揺れに襲われました。 翌日は避難準備と自宅内外の片づけに追われ、とても疲れてしまい、いつもより早めにベッドに入りました。

そして16日の深夜午前1時25分の事です。 前震の時の数倍の激しい揺れが就寝中の私たちを襲いました。自宅は何とか守られましたが、築40年を越えていた「西原村子育てひろば」の建物は、全壊でした。

6月下旬から保育園の一室を間借りする形で『子育てひろば』は再開しましたが、ちょうどその頃、社協を通して東京の「おあしす福祉会（ピアワーク・オアシス）」様から“被災した熊本の子どもたちの為に「木のおもちゃ」をプレゼントします”という主旨のパンフレットが配られました。すぐに申し込みますと、しばらくして子育てひろば宛にたくさんの木のおもちゃが送られてきました。どれも安全でかわいらしい木のおもちゃの数々。包みを開けるや否や「わー！なんて素敵な贈り物でしょう!!」とあの時とても幸せな気持ちに包まれた事は忘れられません。

地震の一年後に私は『子育てひろば』を退職しましたが、そのタイミングでおあしす福祉会の武藤さんのご訪問を受けました。武藤さんに以前『子育てひろば』が建っていた場所をお見せする為にお連れしました。車を降りてその光景を目にした時、どっと涙が溢れて止められなくなりました。実は私もその時初めてさら地になったひろばの跡地を目撃したのです。しかし武藤さんのご訪問をきっかけに、涙することができたおかげで、私は現実を受け入れて前に進めるようになりました。

さて、あれからもうすぐ5年になります。振り返ってみますと私たちは、大変悲しく苦しい経験をしましたが、地震によって失った物や悲しい記憶をはるかに超えるくらい、多くの方々からの思いやりや優しさ、慰め、励まし等たくさんのご支援を受けました。私にとってピアワーク・オアシスさんの木のおもちゃとの出逢いは、まさに貴重なその体験の1つです。改めましておあしす福祉会とピアワーク・オアシスの皆様のご支援を心より感謝申し上げます。

現在コロナ禍の世にあって、東京にお住いの皆様方の事を案じております。どうか皆様お一人お一人の健康が守られますようお祈りしています。そして、いつの日かそちらを訪問して、皆さんに直接お礼をお伝えできる日が来ます事を楽しみに待っています。

木のおもちゃとともに南阿蘇村に届いたメロディー CD「阿蘇～あの橋をいつかあなたと～」

「阿蘇～あの橋をいつかあなたと～」（以下「阿蘇」）は福岡のミュージシャン 三宅美紀子さんが作った。地震で傷んだ阿蘇の風景を見て、「いてもたってもいられず生まれてきたメロディー」に熊本のシンガーソングライター 樋口了一さんが詞を付けた。CDの収益は復興支援のために使われている。熊本、福岡を訪れた時に彼らから「いつか阿蘇大橋でこの曲を演奏したい」という夢を聞いた。

三宅美紀子さん

「阿蘇」を樋口さんの歌で聴いたのは3度目の熊本訪問の際だった。次の日にお会いしたのが西原村の石山美和さん。地震で全壊した職場の跡地を見つめて涙していた石山さんが阿蘇大橋のすぐ近くの出身であることを知った。東京に戻った後、三宅さんに連絡をとり「阿蘇」のCDを購入、石山さんに贈った。

2019年9月、木のおもちゃを子ども達に届けた帰りに石山さんと再会した。その際、石山さんと南阿蘇村の皆さんに樋口さんからのメッセージ動画とこの曲を届けた。これがきっかけとなり「阿蘇」は南阿蘇村の人々に愛される曲となっていった。地震で亡くなられた南阿蘇村の方のご家族のもとにも届いたそうだ。福岡で生まれた楽曲は熊本のミュージシャンによって彩られ、東京を経て木のおもちゃとともにようやく阿蘇の地に行き着いたことになる。

後日、南阿蘇村から「ぜひ新しい阿蘇大橋で樋口さんたちにライブをやってほしい」という話が舞い込んだ。新しい阿蘇大橋は2021年3月7日に開通、あとはこの歌を愛する人が集まるだけだ。新型コロナウィルスの感染拡大によりコンサート活動が難しい状況ではあるが、いつかぜひ実現してほしいと思う。

熊本からのメッセージ

おあしす福祉会の皆さんへ

おあしす福祉会の皆さんお元気ですか？

私の住んでいる熊本は、今年で震災後５年の月日が経ちました。５年間という時間が通常の時間の経過の尺度とは違った流れ方をしているように感じられます。衝撃的な体験は無意識のうちに遠ざけたいと思ってしまうのか、もっと前に起こったような気もしています。東北で津波の被害に遭われた方々のお話を聴いていて、記憶の箱の鍵を開けて、その体験を直視するのがまだ怖くてできないという方が多くいらっしゃることを知りました。その体験と向かい合うことで当時の恐怖や悲しみに直面した時に自分がどうなってしまうのかわからず、それが怖くてまだ向き合うことができないと。

きっと私の中にも同じような記憶の箱があって、その鍵を開けるのを怖がっている自分がいるのだと思います。そんな私達の元におあしす福祉会の皆さんが送ってくださった手作りのおもちゃは、それを受け取った人々の心にどれほどの癒しをもたらしたか知れません。心に傷を作ってしまった体験に、同じ傷ついた経験で共感し合うというのが人間にとって一番癒されるのだと思います。

皆さんが作ってこられた数百個の手作りのおもちゃは、その共感の証だと私は思います。

樋口了一と花咲かフレンズ「小さき花の歌」
レコチョク、iTunes Storeで配信
売上収益は九州ラーメン党そよ風福祉作業所に寄付される

私もステージに立っていて聴いてくださるお客さんの心が自分の中に入ってくるのを感じるときがあります。そしてその心に共感しながら歌うときが一番いい表現ができていると感じます。

今年の３月に阿蘇大橋が開通しました。先日渡ってきたのですが、橋から見える風景に感動しながらも、山の斜面にできた崩落の傷跡が生々しく残っている姿にまだ完全には修復できていない自らの心を見ているような気持ちにもなりました。

これから、少しずつ歩みを進めて、私は私の持ち場で歌を届けることで聴いてくださる皆さんの心に何かを残していけたらと思っています。皆さんもどうか自分のペースで、共感の証を作り続けていっていただけたらと願うばかりです。これからもどうかよろしくお願いいたします。

２０２１年４月

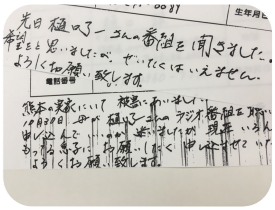
シンガーソングライター　樋口　了一

シンガーソングライター樋口了一と「熊本の子ども達に木のおもちゃを贈る活動」

大学時代の先輩である樋口了一さんと10数年ぶりに再会したのは2016年2月のことだった。SNSでのちょっとしたやりとりをきっかけに、ふと顔が見たくなり渋谷のライブハウスに足を運んだ。お互いどこから話していいのかわからない近況を適当に伝え合い、「じゃあ、また」と特に次の約束もなく店を出た。

２ヶ月後に熊本地震が発生、しばらくしておあしすの熊本での被災地支援活動が決定した。熊本でおこなわれるきょうされん全国大会に樋口さんがゲスト出演することがわかったのもその頃だった。10月、熊本で出番前の楽屋に押しかけ、私たちの活動への協力をお願いした。そして被害が最も大きかった益城町で出会ったのが、被災しながらも支援活動を続ける「小さき花の歌」の作詞者、九州ラーメン党の濱田龍郎さんだった。

東京に帰る日の朝、新聞で益城町の臨時災害FM局「ましきさいがいFM」を見つけた。飛び込みで協力をお願いしようと向かった車の中、カーラジオから樋口さんの歌声が流れた。ましきさいがいFMが益城町の復興ソングとして選んだ「オカエリナサイが聞こえる町」だった。



東京に帰ると樋口さんのラジオ番組「帰ってきた夢旅人」（エフエム熊本他）で私たちの活動を知った方々からたくさんのおもちゃのリクエストが届くようになった。その後もおあしすの活動は樋口さんが関わった楽曲とともに阿蘇や福岡へと広がっていった。

ありがとう、樋口さん。これからもよろしくお願いします。　　（武藤　康司）

“シェアリングin新宿”

2017年～2021年
～ 分かち合い・共生～チャリティーコンサートでの販売活動が実現 ～
（おあしす通信2017年4・5月号、2018年3・4号より）

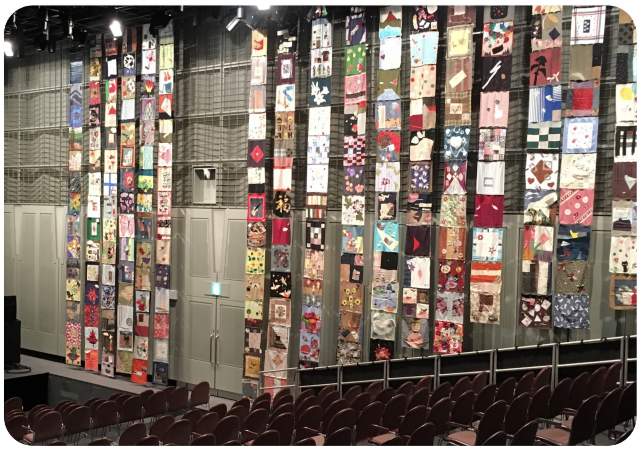
毎年3月におこなわれる復興支援チャリティーコンサート“シェアリングin新宿”におあしす福祉会は2017年から販売と復興支援の展示で参加させていただいている。

シェアリングとの出会い

このコンサートは、2011年3月11日の東日本大震災の直後からミュージシャン達による支援活動としてスタートし、2021年の現在まで続いてきた（2020年はコロナ禍により休止）。「今ある幸せも辛さも、共に分かち合いましょう！」という思いから、多くのミュージシャンが集まり、音楽を通じて震災の記憶を風化させないようにと活動を続けている。参加ミュージシャンの一人、原田真二さんは2018年のステージで客席に向かってこう語りかけている。

「きれいに並んだ石巻の復興住宅には約一万人の方が住まわれておりますが、6割の方が一人暮らしで、更にそのうちの6割の方は高齢者だそうです。震災でお一人になられ、生きて行く希望を失くし、第2、第3の壁を越える必要がある今、さらに我々はそれを盛り上げ、応援する時だと思います。」

このコンサートで販売をさせていただくことになったのは、2016年10月に当法人の職員が熊本の被災地を巡る中で、本コンサートの実行委員でもあり出演者でもある音楽プロデューサーの岡田信一さんと出会えたことがきっかけだった。岡田さんは当法人の取り組みを知り、コンサートでの当法人の活動紹介と販売の場を設けてくれた。



「りつおかだ」　岡田信一さん（右）

震災の記憶を紡ぐパッチワーク

毎年、会場内の両脇の壁にはたくさんのパッチワークが飾られる。これは宮城県石巻市の津波で海水に浸かってしまった着物や反物を何度も洗いなおし、再利用して作ったものだ。震災の記憶を伝えようというコンサート会場やインターネットでの呼びかけに応えた国内外の支援者がこのパッチワークを作り、コンサート会場を彩っている。

大盛況の販売

会場ロビーでは陸前高田の物産展やミュージシャンによるCDの直接販売とサイン会などもおこなわれ、コンサートの前後や休憩時間は大いに賑わう。当法人からは「被災地の子どもたちに木のおもちゃを贈る活動」を続けるピアワーク・オアシスの木工製品や、コム・オアシスで扱っている岩手県宮古市の障がい者施設で製造販売しているコーヒー、レトルトカレー、熊本の益城町で地震に遭い、大きな被害を受けながらも活動してきた九州ラーメン党（そよかぜ福祉作業所）のラーメン販売などおこなってきた。

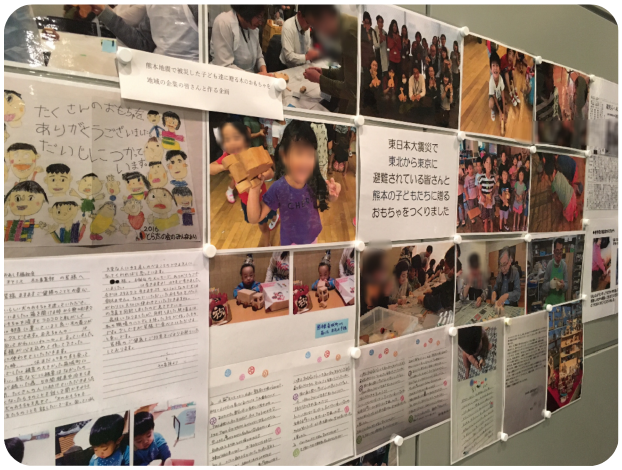
それぞれが同じ思いで・・・

おあしすの販売ブース（写真は手作り楽器）
開演の合間に多くの方が訪れた

このコンサートでは音楽を通じ、年齢、性別、地域、障がいの有無などの垣根なく、多くの方との出会いが生まれ、互いに被災地への思いを寄せ合い、分かち合い、そしてその思いを一つにできる、そんな素敵な時間を共有できる機会となっている。

おあしすの被災地支援活動を紹介するコーナーではコンサートの合間の短い時間にも多くのお客様が買い物をするだけでなく、足を止めて被災地から送られて来た写真や手紙を見てくれる。音楽のプロとして活動する方々とそのお客様、障がいがあっても誰かの役に立ちたいと考える私たち。それぞれ立場は違うかもしれないが、被災した方々を思い、何かしたい、何かしなければ、という気持ちは共通のものではないだろうか。

お客さまの中には購入したハンドオルゴールを「これは、被災地の子どもたちに寄附させてください」と言って私たちに預けてくれる方、「子どもたちに笑顔でいて欲しい」と“被災地の子どもたちへ木のおもちゃを贈る活動”への寄付をくださる方など、毎回温かいやりとりがたくさん生まれている。



2021年、新たな展開へ

2020年のコンサートは新型コロナウィルス感染拡大により中止となった。そして2021年3月、新宿では最後の開催となるシェアリング2021がおこなわれた。2回目の緊急事態宣言の中、客席は間隔をとるため今までの半分の数となり、来場者は全員が検温、手指・足裏の消毒、連絡先の提出をおこなった。来場できない方のためにライブ配信もおこなわれ多くの人が2年ぶりのコンサートを楽しんだ。

おあしす福祉会は毎年、ロビーでの被災地応援商品販売をしてきたが、感染防止のため今回は今まで各地でおこなってきた支援活動の展示をおこなうこととなった。

このコンサートの発案者、ミュージシャンの庄野真代さんは最後の挨拶で「シェアリングのバトンは皆さんに渡りました」と語った。

震災から10年、被災の悲しみは個々に異なるものであって節目や区切りなどない。このコンサートに参加した人たちはこれからそれぞれの形で「シェアリング（わかち合い）」の活動を続け、発展させていくことと思う。

シェアリングコンサート岡田信一さんからのメッセージ

震災復興支援チャリティーコンサート「シェアリング」

～シェアリング～分かち合い、共有～

「わたしたちは、今ある幸せも辛さも、共に分かち合いましょう！という思いから、このコンサートを企画しました。音楽を生業(なりわい)とする人々が、今できることは多くの人に音楽を届けること。そしてその音楽がみなさまに届いて、少しでも幸せな気持ちになったら、パワーが沸いたら、今度はそのパワーを震災被災地支援の力にしてほしい。だから、今チャリティーコンサートを。」

2011年3月11日に起こった東日本大震災の直後に、歌手で「国境なき楽団」の代表理事でもある庄野真代さんの呼びかけに多くのミュージシャンが共感してスタートした音楽による支援活動

・・・それが『Sharing～シェアリング～』です。

シェアリングの活動は、東日本大震災直後の2011年4月に下北沢のCom. Cafe音倉でスタートし、5月にパルテノン多摩へと続きました。

震災の直後から、スペースゼロでも当時の支配人が福島県いわき市出身ということもあり、何か支援できるようなコンサートができないかという話がでて、その頃江東フォークフェスをやっていたプロデューサーの新見さんと田川律さん、庄野さんのマネージャーの澤井さん、スペースゼロをコンサートで使わせて頂いていたヤマハエピキュラスから私と黒川さん、そしてスペースゼロのスタッフが集まってシェアリング実行委員を結成し、会長の庄野真代さんが始めたシェアリングを6月に「シェアリング2011 in 新宿」と銘打って、全労済ホール／スペース・ゼロとの共催で実施しました。

翌年の2012年6月の「シェアリング2012 in 新宿」では公演数を２日間３公演に拡大開催し、その後、宮城県の仙台港と石巻市、福島県会津若松市と福島市の被災地４か所において復興支援コンサートを実施しました。その後は毎年「シェアリング in 新宿」を開催しています。

2017年からは、2016年4月に発生した熊本地震の復興支援の目的とも併せて開催することとし、義援金の寄付活動を行いました。

ちょうどその頃、私はおとなのバンド大賞というラジオ番組とイベントをやっていて、そこに出場してくれたバンドの方が熊本と福岡で熊本地震の復興支援のライブを開催されて、そこに私のユニット「りつ・おかだ」を呼んで頂きました。そこに「おあしす福祉会」の方も来られていて、おあしす福祉会の事を知りました。江東区に事務所があることもその時にお聞きして、東京に戻ってから事務所にお邪魔して、シェアリングの協力をお願いしました。そこからおあしす福祉会の皆さんも協力してくださっています。

2020年。10回目となる「Sharing～シェアリング～2020 in 新宿」を3月に開催する予定でしたが、コロナにより中止。ほぼ同じメンバーで2021年に延期することにしました。残念ながら、現在もまだお客様をお迎えしての開催ができるかどうかはわかりませんが、配信することによって、全国の皆さんに歌を届けたいと思います。

ご支援の程、よろしくお願い致します。

2021年　1月27日　シェアリング実行委員会　岡田　信一

集中豪雨から2年後の朝倉市へ

2017年7月に九州北部を襲った集中豪雨は大きな被害をもたらした。当時、熊本の支援をおこなっていた私たちにとって、ずっと気になっていた地域だった。2019年9月、ようやく福岡県朝倉市を訪ねることができた。

熊本から福岡へ

2019年9月、ミュージシャンであり福岡にあるコミュニティラジオ天神のラジオパーソナリティでもある三宅美紀子さんから番組出演の依頼をいただいた。三宅さんは樋口了一さんが作詞した熊本の復興を願って制作された「阿蘇～あの橋をいつかあなたと～」の作曲者である縁から、おあしすの被災地支援活動をラジオで話すことを提案してくれた。番組出演についてメールでやりとりするうちに、2017年の集中豪雨がどうしても気になっていたと伝えたところ、番組終了後に朝倉市の被災地域を案内していただけることとなった。

コミュニティラジオ天神

被災から2年の「今でも・・」

被災から2年経っての訪問は正直なところ「今から自分達に何ができるのだろう・・」という思いがあった。朝倉市の集中豪雨被災地域を三宅さんと三宅さんの紹介で来てくださった朝倉市在住でダム関係の仕事をしている林雅彦さん、朝倉地域コミュニティ協会の櫻木和弘さんの案内でまわった。

土砂に流され風景が変わった

現在、朝倉の市街地は道路、建物ともきれいに整っているが、林さん、櫻木さんの説明で被災当時は大変な状況であったこと、数か月に渡り悪臭と粉塵に悩まされ、道路が整備されたのは1年半以上経ってからだったことを知った。親しい方のご家族が亡くなった話、水害の後片付けの大変さなどについて聞きながら、山あいの集落に向かった。近づくに連れて水害の跡が色濃くなり、生々しさが増していく。山あいに入ると川が流れる地域を中心にほとんど復旧がなされていない状態となり、国土交通省の旗をつけた大型車両が多く往き来していた。河川は両端を大きく削られ、被災により移転した学校の校舎跡がかろうじて形だけを留めている姿に愕然とする。豪雨による土砂で削られた土地はあまりにも広大でその凄まじさは2年経っても十分にうかがい知ることができた。被災前は200世帯以上あった集落が現在は100程度になってしまったそうだ。林さん、櫻木さんの話によると「本格的な工事ができるのは水路を閉じられる農閑期に限られる。行政の予算によるが、山間部が復旧するまで10年はかかるのではないか」とのことだ。被害の大きさ、復旧までの長い道のりに絶句した。

2年も経ってしまって申し訳ない思いでいっぱいになりながら、今でもここまでの災害の跡が残るこの地域で少しでも子どもたちに喜んでもらいたいと思い、林さん、櫻木さんの協力のもと山あいに住み避難を余儀なくされた子ども達を中心に「被災地の子ども達に木のおもちゃを贈る活動」を展開することとなった。

コロナ禍によるおもちゃ作りの中断を経て・・・

訪問後の2019年10月より林さんと櫻木さんに朝倉市の教育委員会、保育園をまわっていただき、子ども達からのおもちゃのリクエストがおあしすに届き始めた。「パワーショベルがほしい」「トラックがほしい」などいわゆる「はたらく車」（工事車両）のリクエストが多い。あらためて復旧半ばの地域であることを感じた。しかし、年が明けた2020年に新型コロナウィルス感染拡大によっておもちゃ作りを中断せざるをえなくなってしまった。6月に緊急

事態宣言が解除されたものの、東京の感染は収まらず活動は制限せざるをえなかった。

限られた製作時間と少ない人数でおもちゃを作り続け、なんとかプレゼントを贈り終えたのは訪問から1年以上経った2020年のクリスマスだった。遅れてしまって本当に申し訳なかったが、子ども達とご家族が少しでも喜んでくれたら嬉しい。コロナ禍が収束し、また三宅さんと朝倉市の皆さんに会える日が来ることを東京で楽しみにしている。

福岡県朝倉市からのメッセージ

おあしす福祉会の皆様へ

左から三宅さん、林さん、櫻木さん

平成２９年７月九州北部豪雨から今年で４年、福岡県朝倉市及び東峰村では４０名近くの方が亡くなり、今も２名の方が行方不明となっています。この日の降雨量は、朝倉市朝倉地域で１２９mm/h、２６１mm/３hを記録し、降り始めからの降雨量は１，０００mmを超えた地域もありました。河川は氾濫し、溜池の堤防は決壊して住宅などを飲み込みました。

家を失った方々は仮設住宅や地域の公民館などの暮らしを余儀なくされ、近隣の学校や幼稚園、公園などの遊具も流され土砂の仮置き場となり、子供たちの遊び場は失われました。今も寸断された道路や決壊した河川堤防などの復旧工事は続いてはいますが、その土砂は撤去され、日常を取り戻しつつあります。

おあしす福祉会様からのご支援のきっかけは、朝倉地区で被災した子供たちへ木のおもちゃを贈りたいとの連絡をピアニストの三宅美紀子様からお電話をいただいたのが始まりでした。三宅様は２０１６年の熊本地震被災者支援のため「阿蘇～あの橋をいつかあなたと～」を作曲され、その収益金を熊本震災支援として寄付されている方です。三宅様からおあしす福祉会の武藤様をご紹介いただき、２０１９年９月に被災した地を視察され、その状況に大変驚かれ、今回の支援活動にご尽力いただきました。

その後、幼稚園や保育所におあしす福祉会様の支援活動の状況や朝倉地域への思いをお伝えし、今回の木のおもちゃプレゼントとなった次第です。おもちゃを希望される園児と保護者一人ひとりから、どんなおもちゃがいいのか、いつお送りしたらいいのかなど丁寧に聞き取りをされ、希望どおりの心のこもった木の温もりを感じるプレゼントをしていただきました。子供たちは大喜びしているに違いありません。

心温まる橋渡しができたこと、人とのご縁で少しでもお役に立てたことを大変嬉しく思っています。

最後になりましたが、コロナ禍で大変な折、おあしす福祉会武藤様をはじめ手作りしていただいたおあしす福祉会利用者の皆様、繋いでいただいたピアニストの三宅様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

福岡県朝倉市在住　林　雅彦

私たちが目指したい社会とは

災害は突然に多くのものを人から奪う。おあしすの利用者達は被災の様子を見て「自分達にも何かできることはないか」と声をあげた。それが障がい当事者による支援活動として１０年間続いたのは、被災のつらさを自分のものとして感じるところがあったからではないかと思う。

２０１１年の震災直後は多くの人が「絆」という言葉を口にした。一方で東北や九州に足を運ぶうちに、大きな災害は地域社会がもともと抱えていた弱い部分を明らかにすることを知った。障がいがある人が差別を受け、体が動かすことが難しい高齢者、立場が弱い女性や子どもの声は後回しにされる。

１０年経った今はどうだろうか。新型コロナウィルスの感染拡大によって今や日本中（世界中）が被災地であり、誰もが被災者と言える状態が続く。社会全体が不安に駆られる中、「仕方ない」という言葉のもとに、弱い立場の人や声の小さい人が隅に追いやられ、切り捨てられていないだろうか。地域全体が困難な状況に陥った時、私たちは弱い立場にある人、声をあげられない（あげる声が小さい）人にどれだけ目を向けることができるだろうか。叩いてもいい対象を探し、一面的な正義を振りかざして攻撃し、排除していないだろうか。

今回の特集では東日本大震災の５年後から、熊本地震については発生から半年後に始まった５年間の活動を記している。私たちはすぐに現地に駆けつけられるわけではない。私たちが見つめ、話を聴いてきたのは大きな災害に遭った人々の「その後」だ。言わばよそ者である私たちがお会いできる人は限られているし、会う人の思いをすべて背負うことはできない。話すことを望まない方もいた。それでも被災した方々が送る長い「その後」に少しでも目を向け、耳を傾けたいと思ってきた。

2016年7月撮影　南相馬　かしまの一本松

おあしすには今でも時々各地からお礼の手紙が届く。以下は活動当初の２０１１年に木のおもちゃを申し込まれた方からの手紙だ。

『この度は子ども達にあたたかいプレゼント送っていただきありがとうございました。あの日以来、家を無くし未だに主人が行方不明です。小6と4歳と3歳の子ども達は元気を失い、心に深い傷をおってしまいました。1番下の子は「早くパパ帰ってこないかなぁ」とひとり言をいいながら絵を書いたりしています。見ているのがとてもつらいです。ですが、おあしす福祉会の皆様方が送ってくださった荷物が届いて木のパズルを見た瞬間、子ども達は笑顔になりました。あの時の笑顔は一生忘れられません。夜寝るときは枕元に置いて寝ています。利用者の方々が作った心のこもったおもちゃは大切に使わせていただきます。これからもすてきなおもちゃを子ども達のために作り続けて言ってほしいと思います。

子ども達と4人で頑張っていきますので応援していてください。最後にすてきなおもちゃと元気を子ども達にくださりありがとうございました。』　（岩手県宮古市　Ｓさんの手紙から一部抜粋）

私たちがしてきた活動はごく小さなもので、苦しんでいる人の生活を楽にすることや、傷ついた町を元通りにできるわけではない。しかし、突然に大切なものを失った方にとって、その人のことを思いながら作った木のおもちゃを手に取った時に感じるぬくもりには人の心を動かす力があるのではないかと思う。そしてほんのひと時でもほっとすることができたり「またがんばってみよう」と思ってもらえたらとても嬉しい。そして喜んでくれる人がいることが私たちの力にもなる。

「被災地の子ども達に木のおもちゃを贈る活動」が熊本に広がったのは利用者の「熊本はやらないのか？」という声に背中を押されたのがきっかけだった。

利用者達に背中を押され赴いた熊本ではそれぞれの立場で支援をおこなっている方々にもお会いした。シンガーソングライターの樋口了一さんは毎年、宮城県の女川の復興イベントでライブを続けてきた。熊本地震で作業所が全壊してしまった濱田龍郎さんを代表とする九州ラーメン党は熊本地震で自分たちが被災した後も東北をはじめ全国の被災地域でラーメンの炊き出しを続けている。

「熊本で被災した子ども達に木のおもちゃを贈る活動」
東雲の会の皆さんとのおもちゃ作り
（2018年3月撮影）

東北から江東区の東雲に避難していた方々は自分たちが支援を受けるのではなく、熊本の子ども達を支援する、という選択をした。困難を抱えていても「誰かのために」という思いがあれば、たとえ自身が支援される立場であっても誰かを支援する役割を担える。そして「誰かのために」という思いを持っているのはわたし達だけではないことを知った。

災害は誰の身にも起こりうる。死を身近に感じ、多くのものを失う恐怖から異質なもの、自分を脅かすかもしれないものを排除したくなる。一方で強い立場から弱い立場に落とされ、取り残され、切り捨てられる不安に怯える。そんな時、弱い立場にある者はそのつらさを知っているからこそ、共感し、手を取り合うことで助けを必要とする人のためにできることがあるのではないだろうか。

飯舘村の佐藤さんは2014年、仮設住宅の近くの国道で、大雪による渋滞に巻き込まれたことで低血糖状態に陥り、命を失いかけたドライバーを助けた。

「助けられるばかりだった自分たちが『ありがとう』と言われたんです。みんなで泣きました。ありがとうと言われること、人の役に立つということがこんなにも生きる力になるのか、と思いました」佐藤さんは二度目の訪問の際、そんな話をしてくれた。

誰かに必要とされている、誰かの役に立っている、そう感じることができた時に人は大きな力を得る。５年前に福島を訪れた利用者達はその後、新しい一歩を踏み出した。家からの独立を目指す者、自殺者を減らす活動はできないか？と相談に来る者、就職や結婚を実現した者。それぞれの道をゆっくりではあるが着実に歩んでいる。

福島市　飯舘村松川第2仮設住宅にて（当時）
（2016年7月撮影）

立場の強さ弱さに関わらず、誰もが自分の役割を得て、支え合いながらより良い生活を送る、そんな社会へと向かうヒントが私たちの１０年間の活動にあるように思う。

支え合うために遠く離れた地を訪ね、お互いを知ることから始めた。やがて私たちの活動に共感する人が現れた。それぞれが役割を担い、支えられる立場だった人が支える立場にもなった。

私たちはお互いを知ることから始められないだろうか。難しいことはわかっている。それぞれの考え方や価値観の違いに愕然とすることもあると思う。それでも1年以上にわたるコロナ禍で疲弊し、不安を抱える今だからこそ、誰も切り捨てない、誰もが切り捨てられる不安を感じなくてよい社会を作りたい。　（武藤　康司）

発行人：障害者団体定期刊行物協会　　世田谷区祖師谷3-1-17ヴェルドゥーラ祖師谷102
編集人：キープハート／おあしすの事業を支える市民の会　　定価100円
東京都江東区住吉1-17-20住吉ビル4階　ウィル・オアシス内